



楊柳文庫

世卷

~ 13
3330
20



3330
20

武道陽柳文庫卷之三拾壹

目錄

一 卷之三拾壹 柳文庫卷之三拾壹
お仲間親子といふ事
山本岩之部

余儀

武道陽柳文庫卷之三拾壹

目錄

- 一 名を更を又お仲間親子といふ事
ちかやうにたふし ちかやう
- 一 お仲間病死の事
やまのしとふ
- 一 山本岩之部 室田の白部と合の事
そのまきい
- 一 長屋三郎又六郎在家を絶する事
あつら

十八卷
本大出展部

是れもあしらの母にこそ
うろくは経るをすの事あり
ま唯堪忍の二字をちりり
めろくをちりり歌のりあり
るづつ活角を屋敷ちりり達
くれよままのちりり一室田み
りよく染がうとたろくを
至て三年や片後物よりぐ

て合えく一依り赤のよき
めけけあとのちりりよとりあり
若し先よりあひめく云々九歳を
を一依りしり次で細死の
緒のまのちりりむろく成りあり
及云節き今よの程おのごき
りごた有るき死後より
けけ申り起り声をちりりあげ

とらた籠まが此園あやこよりうり
い海うみあも山やまあもるまくぐさしけうの
あふ西にしありりりきわとたの禱いた建たを
まどもまあひあににをを記たのししはは一一お
入いりりああらら任にん者しやももつつららののをを
そねそよよ引ひくく臨りん麓ろく屋や七しち高たか土つちのの
水みづ屋やよよ籠かご子こをを進あ拂いひひしし公こう
ののりりどどいい無む泥でい尾び尾び石いしとと辰たつ三さん郎らうをを

海うみををぐぐくくくく名なををままのの婦ふややああいい
のの者ものよよつつつつ種しゅををののぶぶててよよ御ご村むら
をを籠かご屋や一いっ長ちやうののああくくととつつをを
ままりりああもも山やまののああまま三さん郎らうのの母ははののをを
ままきき籠かご白しろ岩いわををままままよよゆゆららてて決けつりりをを
頁えんををかかくくくく細さいくくもも泥でいれれののつつくく
ああががくくもも袖そでををととししよよののあありり
トトよよととちちくくくく比ひ歩ふ力りきああややりり

とさき白くは氣をとくりきりて
おのよふふ家あがらあやまね
常父の歎や母の遠言をさるん
いこの文つりりるる後師云々千と
多めらう生れたの物もさねがね
今いち年の家さねがねおあま
歎を残しあは後ねさくはと
りそりてさくむやうはく

とくくは長州萩の城も所
よつてさまがうさすを尋んと
ゆ多りの勢儀床くさるるう
室田又四郎の屋敷をさるる
うさゆひいと海印は室田のを
あかさを細くとおくさるる
それにはたれのをさるる
室田氏の仁徳をさるる

うわしとありーとあしと案
也ーとあしと案
年君の明り元や金田を
ゆりふ定うて合力をうけたあ
ちししとあしと案
而倒くあしと案
ちちちとあしと案
うーとあしと案

ともしとあしと案
ふりたあしと案
てあしと案
をーとあしと案
のりのりあしと案
とあしと案
あしと案
あしと案

をりきんちうと念ひよおしく
なればなると申すはよしと云ふ
て是田の中をくると云ふ

世あいうちわが田又申す
りつてはを深くしと云ふ
よ徳しと云ふ
とて或い合ふと云ふ
徳と云ふ

ちんをばあしと云ふ
よる春のふらのうらをいふ
至貧者者をいふ
を名てちひと云ふ
どもあざらりのを悟り好
曲信人を印しと云ふ
て命りをうらと云ふ
をまの言の英雄と云ふ

どよそねるどよは家因着
厨めらりぐまだ急ぎりめい
ゆらぎねども貧乏人を食に
あどこれや家本食をた
めにあちがさざるちり依
て家本どしを食服人よ不
どそん半を婦人あめくは
らんとまて多治にあらん也

とく進之んそねるをうの
勢後をそつて今度三郎
よき一くねく一しり
そねるそねるの助けのよふ不

三郎三郎金を回よ教句の事

三郎三郎又おが紅糸を結ぶ事

あも三郎三郎の教くのとらり

三回又四郎の中へまゝくゆき
 それば流ちらうゆくゆき長屋
 つゆへ掃きゆきゆきゆきゆき
 云々其まゆで株をたぎりて
 玉建つゆの中へはあひのち
 今よ音あどゆきゆきゆき
 三島い紗又四郎を一口みま
 ありゆきゆきゆきゆきゆき

幸ひよちよちゆきゆきゆき
 て空ろ音を紙ゆきゆき
 よ流りゆきゆきゆきゆき
 をゆればゆきゆきゆきゆき
 ゆきゆきのゆきゆきゆき
 多ゆきゆきゆきゆきゆき
 よゆきゆきゆきゆきゆき
 仁者の鏡とゆきゆきゆきゆき

と傳りて〜P〜と取〜
よ聲あてりや〜P〜と
り不空回ちひよ〜P〜と
氣氣性そのも〜P〜と
らみし〜P〜と
〜P〜と
よ多〜P〜と
〜P〜と

辰三郎〜P〜と
と〜P〜と
を〜P〜と
と〜P〜と
四が〜P〜と
平〜P〜と
年〜P〜と

おもしろく物ありくを流る侍
ことよは仁義の相傳りり位を
きしよは極ういびうこま又さとき
振群のちがひうり後三節方心
よあどろりたありとだかうを地よ
修多うの室田も後三節ををり
うよえてまがうは吹れ袖をさぬ
ども物——ううざう人お界物

あのふよりふえのまをう
たぐひあわれうらまきうはは
感——うらまきう時の振後よ
て半あううらまきうは室田の後
云節よむうい目しあふは傾き也
まは今を月いあうよ一高あり
う——まきうあういあうあわ
い名でうくは泊うまよとあて

夏之節一ちひも寝むももく
亡母のちちぢまのよちとと
中よちらとびとちらとちらとあ
世と歌くちちとちらとちらと
えぐちちを食をちのとちらと
此屋のちちちちちちのす
ちちちち一ちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちち

の夏之節一ちひも寝むももく
亡母のちちぢまのよちとと
中よちらとびとちらとちらとあ
世と歌くちちとちらとちらと
えぐちちを食をちのとちらと
此屋のちちちちちちのす
ちちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちち



歌のまゝおんがけしうぐまを玉
とまを付をまを田又四鼎一少
子ちり歌の丹波の玉世山の峰を
青山の肥ち攻の家士とちり今
姓名をゆくまめ松田彦三郎
と甲のちり候一あがし碓
下年一ゆり世のまひり一と世の
人のま何ん歌のうくこのま也

まうまば歌又まの風をくま
まをくままをまはま一ま加
かままにまをりて人くまのま
りまあまを所一とあままま
よまのままもまをまをま
くまままままのままま
ままままままままま
ままのまのまままま

あまのこ
のまやまのこくはくへるへたか
をうらまひまはくへるへたか
てまのこくへまはくへるへたか
うらまひのまはくへるへたか
のつみでまはくへるへたか
て命のまはくへるへたか
又まのこくへまはくへるへたか
まのこくへまはくへるへたか
まのこくへまはくへるへたか

いらくあまのこくへまはくへるへたか
うらまひのまはくへるへたか
又まのこくへまはくへるへたか

あまのこくへまはくへるへたか

